

園長だより NO81



環境を通じての育ち

秋の到来、台風が次々とやってきて、落ちついた穏やかな日々が続くことを願わないわけにはいきません。新型コロナウイルス感染者数も徐々に減っているものの状況が一変することも考えられる。世界情勢も変化がみられる。せめて、子どもの生活（環境）だけは様々な変化の影響を軽減し維持したいと考えている。

子どもの生活では子ども自身の興味や関心が触発され自らが関わりたくなるような環境を構成することが重要と言われる。

子どもたちの経験や育とうとする姿に大人はアンテナを向け、子どもたちの持ち合わせている資質や能力を十分に発揮できるように工夫することも忘れてはならない。

とある幼稚園の話ですが子どもの園生活には指導計画（カリキュラム）というものがあるが面前の子どもの姿を十分に理解せず、計画を立案しているということを聞いた。管理者（主任）がすべての年齢の計画を立てるといって、毎年同じ内容、活動も決まりきったものの季節の歳時記に合わせた製作、発表会では演じる題材を幾つか選定しクラスに割り当てる。子どもの主体も保育士の主体（考え、保育内容を構成する）もあったものではないという。当然、目の前の状況を徹視的にみていないので指導計画はすべてマニュアル化されて

いる、児童の配慮なども言葉は悪いが取扱説明書のようにマニュアル化されている。なぜ、それぞれの子どもたち、クラス担任の思いが反映されず管理者に管理されているのか？クラス間の差が出てはいけないということらしい、だから園生活の大半を管理し同じことをやらせることに終始している。

別の幼稚園の話である。先に取り上げた幼稚園とは違い、子どもの育っている姿から興味、関心を感じ取り、尚且つ保育者がやりたいなどと思うこと（子どもの思いを汲み取りながら考え、保育を構成する）ができる風土がある幼稚園、5歳児クラスの先生が子ども達と活動を考え一緒に稲を育て、少量だが収穫しおいしく食したという、先に取り上げた園と異なるところはマニュアルがないということ、日々生活しながら生育に必要な行為、知恵を考え、調べ学んでいった。※すべてノープランで活動しているわけではなく子どもとのかかわりのプロセスなどはしっかりと又状況に応じて対応できるプランを用意している。

その翌年のことである。前年度、稲を育てた兄がいる弟が年長になった。

その保護者は「今年は稲を育てないのか？」「やるものだと思っていたが？」と少々クレーム気味で担任に思いを伝えたという。

担任は「昨年の活動は昨年の担任と子ども達と考えた活動であり、今年の子どもの達の興味、関心、そして保育者（私）の思いや願い

は異なるため違う活動を選択したと伝えたという。

※ その年は子どもたちと育てたいものを決めてできるだけ収穫したものをつかい食する機会をつくったという。

ひとりひとりに寄り添うことの大切さ

人それぞれ違っていいとは先人の詩人が言っていたような言葉ですが、それぞれの違いに対応しながらも集団生活を営んでいくのが保育園（幼稚園）ではないかと私は思う。当然、年齢が上がればみんなで一緒にやる活動もあるが決められたものを決められた通りに進めては「子どもの気づき・発見」すら感じとれない大人になってしまう。少々遠回りでも子どもなりの思考や取り組みに必要な時間を作ってあげなくてはならない。

マニュアルありきになってしまうと当然子どもを中心にすえた保育は展開されていかない。大まかは発達をもとに考え出されている内容はそれぞれの状況・子どもの気づき・発見・その時々思いなどを受けとめてあげることが希薄なる。そしてなによりもそのマニュアル通りに進めようとする。

環境を通じての保育とは物的な環境に加えて人的な環境がある。一緒にいる、過ごす大人が子どもの理解に優れていて、子どもの姿から感じ取ったことを保育に反映させてあげることが大切なことだと思っています。

禁止のことがばが氾濫しないこと

子どもの創造性を育み、連鎖が生まれる

やりたいこと やってみたいこと

思っていることが実現できることが子どもの生活では重要と考える。

大人からすれば面倒で遠回り、時には危なっかしいことも寄り添う大人がいれば取り組ませてあげたいと考える。



水たまりに入る。視覚 100%のこの時代、感情のおもむくままに遊びだします。子どもたちの歓声と思ひ思ひの気づきの発信、何よりもにっこりとあたたかいまなざしで見ている大人の存在があります。十分に承認されている遊び



満足いくまで遊んだ経験が 創造の連鎖を生み出していく、楽しいを より楽しく「どんどん ぐるぐる まだまだ描けるよ！」やりたいことをできる園風土が無限の創造性を引き出していきます

（おぞら保育園 園長 廣部信隆）